

松江の中世石塔訪問記

狭川真一

平成 26 (2014) 年 7 月、松江市からの依頼で、松江市およびその関連地域の中世石塔について現地訪問をさせていただく機会を得た。本稿はその折に実見した主要な石塔に関して、簡単に所見をまとめたものである。各地点で長い時間を割いて調査したものではないので、あくまでも訪問時のメモを頼りに記述した覚書程度であることをお断りしておく。さらに、数値的な情報は獲得していないので記載していない。また本稿は、先行研究のすべてを踏まえて記述したものではないこともご了解願いたい。

なお、本稿中に言う来待石は凝灰質砂岩、白粉石（白来待石）は白色凝灰岩である（松江石造物研究会 2014）。

①正林寺石塔群 松江市大庭町（図 1～5）

寺の裏手、山側に北島国造家五輪塔群と称する一群がある。既報告（近藤 1968）にしたがって五輪塔群のうち向かって左から 1 号塔～ 4 号塔と仮称する⁽¹⁾。なお、2 号塔は時期的に異なるものであるほか、各塔の間には五輪塔や宝篋印塔の残欠があるが、今回は大型で白粉石製の 3 基についてのみ記述する。

まず 1 号塔は、火輪以上を失い、地輪も層状に破損していて、正面に「ア」とみられる梵字があるが、90 度転倒して据えられている。したがって現状の地輪幅は正しい数値を示さない。また、梵字の上辺と地輪上辺との間が他の塔にくらべると広く開いている。水輪は、正面に梵字「バン」が大きく記載される。背面の大半は欠損していて内部が良く見えており、水輪上面から穿たれた大きな奉籠孔^{ほうろうこう}が確認できる。なお、風化して判断が難しいが、水輪上面の奉籠孔口縁部分は突帯状に立ち上がりを作るようである。なお、この水輪欠損部分は、当墓所入口右手に置かれる残欠が該当するだろう。また、水輪の背面に凭れるように空風輪が



図1 正林寺石塔群



図2 正林寺石塔群1号塔

半裁状態でおかれている。

次に3号は、空風輪欠失。地輪は完全に近い姿で、正面に梵字「ア」を大きく刻む。上面の水垂勾配はやや強めである。水輪は縦に割れているが、正面に大きく梵字「バ」を刻む。火輪は正面に梵字「ラン」を大きく配するが、空点が欠落しているため、当初の高さはもう少し高いと判断できる。軒口は厚めで、軒反は緩やかに反り上がって真反りに近いものである。本塔は、大きさから見て一具のように見えるが、梵字の配置に問題がある。

4号塔は、空風輪に別物を転用している。地輪は正面に梵字「アン」（莊嚴点なし）を配し、上面の水垂勾配はやや強めである。水輪は破損しており、内部に奉籠孔の存在が確認できる。正面に梵字「バン」を大きく配する。火輪は上面を大きく欠損しているようで、梵字の上部に余裕がなさすぎる。その梵字は「ラ」と判断しておく。軒口は厚めで、3号塔に比べると軒反は直線部分が目立つ。この塔の背後にも空風輪の残欠がある。

さて、3基の塔は梵字の配列から当初の組み合わせでないことは明らかであるが、いずれも同じような規模の部材であり、梵字が1面のみに記載されるという特徴も共通するので、3基の中で組合せが入れ替わる程度と考えて差し支えない。残念ながら全貌を把握できないままだが、地輪は「ア」が2点、「アン」が1点、水輪は「バン」が2点、「バ」が1点、火輪は「ラン」「ラ」各1点である。空風輪は未確認。これから推定される梵字の配列は、本塔が五輪塔であることを踏まえると、大日法身真言（ア・バン・ラン・カン・ケン）、五大種子発心門（ア・バ・ラ・カ・キャ）、五大種子涅槃門（アン・バン・ラン・カン・ケン）の3基となる。すべて一面のみの記載であり、各塔それぞれ異なった真言を配することと、全体が揃うことで意味を成した可能性がある。つまり、順番に製作されたとみるより、同時に製作された可能性を視野に入れておきたい。

五輪塔の年代はその形状的な特徴のほか、梵字が面に対して大きい文字であること、大日法身真言塔を含んでいること、水輪に奉籠孔があることなどを踏まえると、概ね13世紀後半～14世紀前半頃のものだと判断しておきたい。北島国造家一族の墓であるか否かは即断できないが、当該地域に根を張った領主階層の一族墓と理解できよう。

なお、1号塔の隣（向かって右側）に六角形の脚付台座に宝珠が乗ったような資料がある。台座なら、コーナー部分に脚部が作られるべきと思うが、この資料は逆にコーナー部分が切り取られている。上部の宝珠は方形の柄を作り出して差し込んでおり、これでほぼ本来の形態を維持していると考えたい。おそらく、六角堂の頂部に乗る石造露盤かと思われる。詳細な調査を待ちたい。



図3 正林寺石塔群3号塔



図4 正林寺石塔群4号塔



図5 六角堂の頂部に乗る石造露盤か

②狩山八幡宮伝佐世伊豆守墓 雲南市大東町下佐世 (図6・7)

神社の奥に2基の白粉石製大型五輪塔が祀られる。向かって右側は大きな塔で、各輪に雄大な梵字を配する。それぞれ、五大種子涅槃門・大日報身真言・大日心身真言と金剛界五仏を配置するが、おそらく地輪の梵字の一字を書き間違っているとみられ、五大種子涅槃門は大日法身真言の誤記であろう。火輪は層状の破損が目立つが、軒上辺が真反りに近く、下辺は左右に近いところで反り上がる。

左側の塔はやや小型で空風輪を失い別の水輪が重ねてある。火輪は上半部を欠損しているため高さが低く見える。梵字は右塔と同じく4面に配され、三種悉地真言(大日法身真言・大日報身真言・大日心身真言)と金剛界五仏であろう。水輪には上面から奉籠孔が穿たれ、火輪の裏面を少し彫り込んで蓋としている。火輪の軒反は真反り風で、軒裏面も大きく反り上げている。

年代的には、正林寺塔群に近いが火輪の軒反が直線化するのが目立つためやや下ると考え、14世紀前半頃を考えておきたい。正林寺塔のように同時造営ではないと思われるが、近接した時期に作られたとみられ、当該地域の領主階層の墓塔であろう。



図6 狩山八幡宮伝佐世伊豆守墓 (向かって右側)

③伝大野次郎左衛門墓 松江市宍道町西来待 (図8)

県立わかたけ学園東側に所在する3m余りの巨大な来待石製の五輪塔。地輪は立方体に近く、水輪の形状は球形に近い。火輪はやや背が高く、軒口上辺の反りはやや強めの真反りで左右端ではさらに強く立ち上がる。下辺はほぼ直線を呈しているが、左右端に至って少し反りを持たせる。下辺の直線部分が長いものは新しく思えるが、先の狩山八幡宮塔でも類似した状況を呈しているため、これをもって新しい要素とする必要はなさそうである。空風輪は風化が著しいが、残存する部分を見る限り、空輪は宝珠形を呈しているようである。

これらの各輪各面には梵字が彫られており、いずれも面に対して大きなもので、配置される真言は、三種悉地真言と金剛界五仏である。狩山八幡宮塔にもこの真言の配置が見られたが、同種のもの、平安時代後期と鎌倉時代後期に若干例が知られる。平安時代のもは大分県臼杵市中尾の嘉応二年(1170)銘塔だが、鎌倉時代後期では、高野山源空塔が正和四年(1315)の紀年がある。この他、大分県御霊神社塔や熊本県満願寺塔などにも見受けられ、この時期に限られた範囲で受容された真言であることがわかる(狭川2002)。この点を踏まえると、本塔もそのあたりまで遡るかと思われるが、全体の形状はやはり後発的な要素を多く持っていることから、上記の年代よりも少々下らせて捉え、14世紀後半を前後する時期の所産と考えておく。それでも、来待石製の石塔では最古級に属することになるだろう。

課題はこのような巨大な塔を建立する目的である。畿内では鎌倉時代中期あたりから、結縁による造塔や道路や橋の供養に建立される石塔に大きなものが見られ、鎌倉時代後期では律宗系の高僧の墓所に用いられることもあるが、それら以外では事例を見出すのは難しい。立地もおそらく当初に近い位置と



図7 狩山八幡宮伝佐世伊豆守墓 (向かって左側)

思われるので、その点を踏まえて再検討を要するものである。

また、来待石製品に関して戦国期以降、近世にその生産の中心があることが知られており（樋口 2004）、この石材利用の出現期が注意される。本塔と次の岩屋寺の一部の五輪塔は 14 世紀後半頃に想定できるので、ここに来待石製品の製作年代の一点が存在することになる。しかし、これ以降、16 世紀に至るまでにはまだ製品の所在は確認されておらず、大きな課題と言える。

さらに不思議なことは、近世に作られた来待石製品は悉く風化が進行して劣化が著しいものが多いのに対して、それよりさらに 200 年余り古いと考えられるこれらの塔が、多少の劣化はあるものの形状を留めている事実をどう考えればよいのであろうか。

いくつか思いつくが、たとえば 14 世紀後半には今より良質（硬質）の来待石が産出したが、近世の受容拡大で硬質な部分は取り尽したことで、和泉



図8 伝大野次郎左衛門墓塔

砂岩のような軟質な石材の製品が流行し、量産されたことが要因、あるいは根本的に岩脈の異なる地点から採取されたか、転石を加工した可能性も指摘できよう。なお、転石利用はこの地域の古墳時代の石棺材に来待石が利用されている点で、すでに指摘されている（宍道町教委ほか 1995）とのことである。

④岩屋寺石塔群 松江市宍道町上来待（図 9～12）

現本堂左手から山に入っていくと薬師堂に到着する。高さ 10m はあろうかという切通し下半部が大きく抉れていて、そこが岩窟状になり、奥に方形の龕（中央窟）がある。今はその前に薬師堂（梁間 4 間、桁行 2 間）が建っているが、中央窟周辺には梁や柱を立てた形跡があるので、本来はこの彫り込みが龕の本体でそれに覆堂を密着して建てたことがうかがえる。

さて石塔だが、岩窟に向かって左手の各所に残欠が多数確認できる。この石塔群はすでに詳細な報告が行われている（岩屋寺石造物調査団 2008）ので、以下には筆者が注意したことに限定して記述する。

まず岩窟に向かって左側にある小さな龕内（1 号窟）には、戦国期頃の五輪塔や宝篋印塔が安置される。宝篋印塔の基礎には「文禄」の銘が読めるが、来待石製で脆弱であり、下面から風化が進んでいるので、せめて下からの水分上昇を食い止めるべきである。

また、隣接する五輪塔は表面に調整時の痕跡が明瞭に観察できる。空風輪表面、火輪屋根勾配部分や軒口、水輪表面などに細かなノミ状の工具痕が多数観察できる（図 9～11）。他の同型の石塔との比較が必要であるが、このような状態で完成品として認められるのか否かである。一般的に見受ける同時



図9 空風輪のノミ状工具痕
(岩屋寺石塔群1号窟内五輪塔)



図10 火輪のノミ状工具痕
(岩屋寺石塔群1号窟内五輪塔)



図11 水輪のノミ状工具痕
(岩屋寺石塔群1号窟内五輪塔)

期の完成品には、風化を考慮しても表面に調整痕は見いだせない。そうすると、この場所で石塔を加工、調整していたのではないかという推測も出てくる。そういう視点で詳細な調査が必要かと思う。

さて、この窟のある地点を左奥へ進むと大きな切り立った石壁が見える。先の資料が未成品なら、ここが石切り場だった可能性も推定できよう。壁面には人為的に削り込んだとみられる横方向の筋が見えているので、石切り時の痕跡が辛うじて残っている可能性があるだろう。後述する石窟のある地点とこの切り立った石壁の間は、上部から崩落した土砂で埋まったような地形になっており、発掘してその土砂を取り除くと、未成品の残欠が残存しているかも知れない。想像はどんどん膨らんでくる。

さらにその奥に進むと、近年崩落したような箇所があり、中央中ほどに石窟（石龕）風のものが存在した痕跡がある。そこにも石塔が集められており（F群）、その中に小形ながら梵字を大きく刻む来待石製の五輪塔残欠がある。先の報告でF1-3、F2-1、F2-2として紹介されるもので、現在は散在しているものの、空風輪の形はまだ球体を維持しており、表面の梵字は「ウン？」「ケン」を彫る（F2-1）。火輪は軒口がやや外傾するものの上辺は強めの真反り風となり、梵字は「ラ」を浅めの薬研彫りとする（F2-2）。水輪は球体をよく維持しており、梵字は薬研彫で「ビ」が刻まれる（F1-3）。地輪は確認できていないが、これらを一具とすると、大日報身真言（ア・ビ・ラ・ウン・ケン）の塔となる（図12に復原）。この真言を採用するものは少なく、中世後期や近世には見かけない。塔各部の形状に加えて、梵字の種類、梵字の大きさや彫り方を踏まえると、小形ながら14世紀後期前後に考えたい。

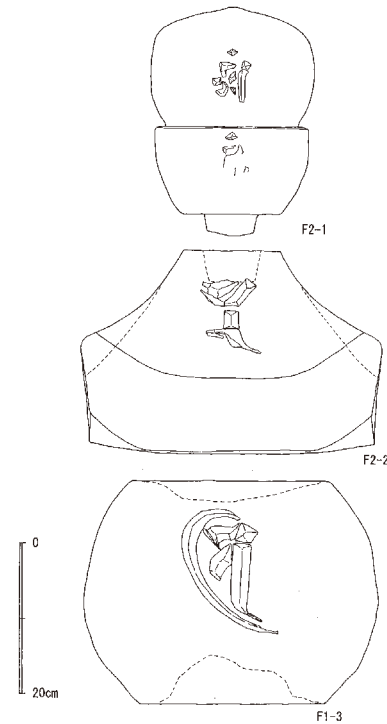


図12 五輪塔組合せ復元図(S=1/10)
(岩屋寺石塔群F群内内五輪塔)

以上、筆者が気になった石塔を概観した。来待石や白粉石を用いた石塔は、鎌倉時代から南北朝時代まで遡ることは先に示したとおりであり、今後の資料探索でより詳細なことが語られるであろう。また、石塔製作地についても検討する余地が残されている。未成品の発見や、状態の良い石塔の表面観察データの蓄積が待たれる。さらに、石材に関する問題は、その産地を同定する根拠と合わせて大きな課題である。

さて、石塔群として把握できる正林寺石塔群と狩山八幡宮石塔群は、いずれも在地武士層の一族墓所を形成していたと思われるもので、正林寺のものは13世紀後半頃まで遡る可能性が高い。全国的にみ

ると武士の墓所に石塔が採用されはじめるのは13世紀後半頃で、神奈川県称名寺の北条氏墓所（五輪塔と宝篋印塔）や栃木県樺崎寺跡の足利氏墓所（五輪塔）、滋賀県京極氏墓所（宝篋印塔）等が初期のものであり、いち早く中央の墓制が導入されていることが分かる。これらの墓所は、しばらくの間継続して石塔が営まれており、近在では鳥取県倉吉市大日寺の一群が、幅広い年代にまたがり継続的に造営されている事例である。

しかし、正林寺石塔群や狩山八幡宮石塔群は、現状でそれほどの継続性は認められないので、単純に同列に扱うのは危険かも知れないが、成立年代を考えるとやはり地域の武士層が造立者と考えられよう。ちなみに短期間の造営で終わっているものに熊本県西安寺五輪塔群（相良氏三代／13世紀中頃～14世紀初頭）、同県満願寺五輪塔群（九州北条氏三代／14世紀前半）などがあり、近在では鳥取県大山町赤坂の大五輪塔に大型塔数基分の残欠があり、鳥取県北栄町上種五輪塔も同大の塔が2基並び、周囲は段状に造成されて、石列が観察されるような環境にある。

銘を持たない石塔の主を特定するのは難しいが、石塔群の盛衰を把握することは、その地域での勢力の有り方を考える上で参考になるはずである。中世史研究と融合すれば、より雄弁に歴史を語ってくれるものと思う。

今回はきわめて雑駁な記述に終わったが、重要な石塔も多く、将来もし機会があれば、実測図作成を含めた詳細な調査を行いたいと願う。

なお、文末になったが、現地調査では岡崎雄二郎氏、西尾克己氏、木下誠氏に大変お世話になった。また、鳥取県の資料は中森祥氏、濱野浩美氏、佐伯純也氏からご教示を得た。感謝申し上げます。

注

- (1) 近藤報告と現状では1号塔の地輪の向きが異なっており、再整理された可能性が高い。そのため本稿と所見が異なる部分がある。

引用・参考文献

- 岩屋寺石造物調査団 2008 「岩屋寺石造物調査報告」『来待ストーン研究』9 来待ストーンミュージアム
近藤正 1968 「正林寺の五輪石塔群」『島根県文化財調査報告書』第5集、島根県教育委員会
宍道町教育委員会、出雲考古学研究会編 1995 『石と人』（宍道町ふるさと文庫8）宍道町教育委員会
樋口英行 2004 『白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔』（宍道町ふるさと文庫19）宍道町菟古館
松江石造物研究会 2014 「龍海山三明院佛谷寺に所在する石造物群について」『伯耆文化研究』第15号、伯耆文化研究会
狭川真一 2002 「五輪塔の成立とその背景」『元興寺文化財研究所研究報告2001』（財）元興寺文化財研究所

（さがわ しんいち 公益財団法人元興寺文化財研究所研究部長）